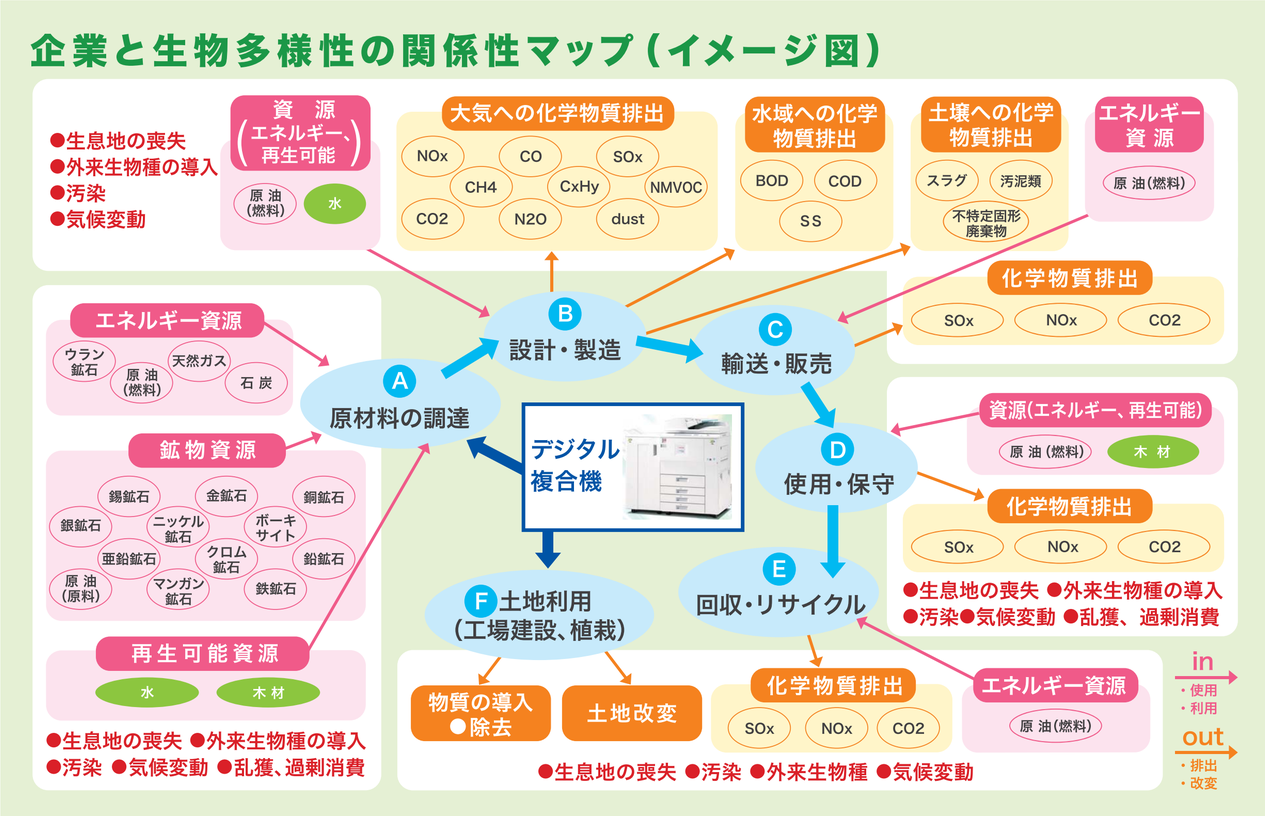
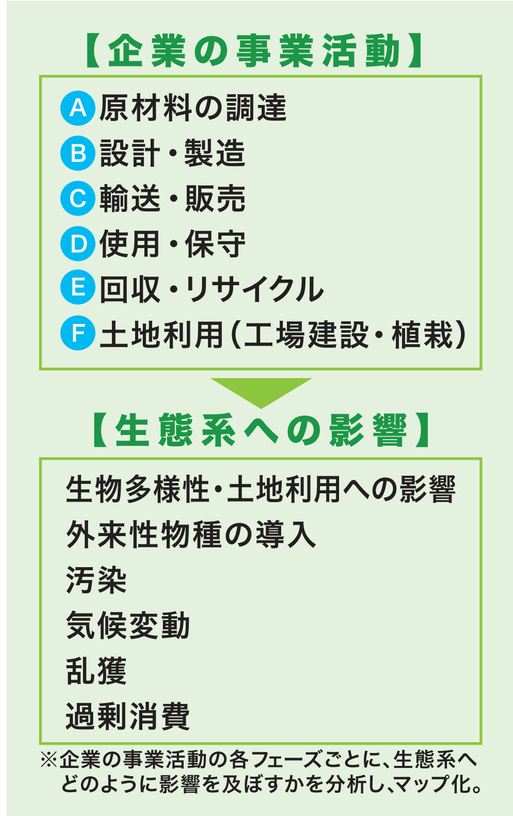
右

JBIB
Japan Business Initiative for Conservation and Sustainable Use of Biodiversity
企業と生物多様性イニシアティブ

JBIBの活動

■企業活動と生物多様性の関係を可視化する研究





企業が生物多様性の取り組みを考える際に、自社の事業活動が生物多様性とどう関係しているかを理解し、自社内で情報共有することが重要です。ＪＢＩＢでは、これを実現する為、難しい分析表やレポートではなく、できるだけわかりやすい絵に表して生物多様性との関係を理解しようとの研究を始め、「関係性マップ」を作成しました。「関係性マップ」は、イメージ図と生物多様性への影響の大きさ等を特定する分析表で構成されています。

■企業が使用している土地の評価方法の研究

■土地利用状況調査票

評価項目			単位	備考（計算方法など）
敷地等		敷地面積	m²	
		建築面積	m²	
		水面面積率	%	自動計算：水面面積 / 敷地面積
		緑化面積率	%	自動計算：(外構緑化＋屋上緑化＋壁面緑化)/ 敷地面積
		緑地の平均土壌厚	cm	人工地盤上に客土された土壌の平均値を概算で算出。緑化部位ごとの土壌厚を植栽計画図等から読み取って算出。
		まとまった緑地からの距離	m	面積 4ha 以上の最寄の公園や樹林地などからの最短距離を概数で記入。
舗装等		舗装面積（非透水，非保水）	m²	アスファルト舗装やコンクリート舗装など、透水性・保水性のない舗装部分の面積を求積。
		舗装面積（透水性）	m²	
		舗装面積（保水性）	m²	
		水面面積	m²	
緑化	面積	外構緑化面積	m²	中高木植栽の求積方法：独立した樹木は、樹木ごとの樹冠の水平投影面積 (S) を算出して、積算する。樹高を H とすると、樹冠の半径は 0.35×H とみなして良い。S=3.14×(0.35×H)2 ただし、水平面に投影した場合、樹冠が重なっている場合は、重複カウントしない。樹高 H の簡易測定方法は、別紙資料を参照。
		屋上緑化面積	m²	
		壁面緑化面積	m²	緑化補助資材の面積ではなく、実際に緑化されている正面の面積を概算で求積。
	植物種の構成	高木	本	高木であるかどうかは、樹種により分類（別表による）。
		中木	本	中木であるかどうかは、樹種により分類（別表による）。
		低木	本	毎木調査による本数のカウントが困難な場合は、1m² あたりの低木植栽本数を調べ、それに面積を乗じて算出
		地被	m²	樹木と混植されている植栽のうち、地表面を被覆している植栽の面積を算出する。水平面に投影した場合、低木～高木と重なっている場合は、重複カウントせず、上層植栽の面積を優先する。
		草地	m²	樹木と混植されていない草本類による緑地の面積を算出する。芝以外の在来種草本類の場合は、その種名を特記する。
		在来種	面積, 本数・株数, 種数	面積、本数・株数または種数を記入し、単位を選択する。面積がわかる場合、面積を優先して記入する。
		園芸種（栽培種）・外来種	面積, 本数・株数, 種数	同上
		常緑樹	面積, 本数・株数, 種数	面積、本数または種数を記入し、単位を選択する。面積がわかる場合、面積を優先して記入する。
		落葉樹	面積, 本数・株数, 種数	同上
		実のなる木	面積, 本数・株数, 種数	同上
		花木	面積, 本数・株数, 種数	同上
		食草・食樹	面積, 本数・株数, 種数	面積、本数・株数または種数を記入し、単位を選択する。面積がわかる場合、面積を優先して記入する。
		在来種（緑化面積）率	%	在来種（緑化面積）/（在来種＋園芸種・外来種）（緑化面積）
		落葉、実、花、食草	面積, 本数・株数, 種数	面積、本数・株数または種数を記入し、単位を選択する。面積がわかる場合、面積を優先して記入する。
運用		水使用量	m³	事業所における上水使用量を概算で記入。
		農薬使用量	種類, g	種類と量を記入。液剤の場合は原液の量を記入。粒剤の場合は、その量をそのまま記入。

■作成に用いる資料と記入方法

- 施設平面図：敷地のなかで建築物や舗装などで人工的に被覆されているところと、緑地など人工的に被覆されていないところを見分けられ、敷地面積や建築面積がわかるもの
- 緑化平面図：敷地の中で人工的にカバーされていないところがどのような状態かを見分けられ、外構緑化、屋上緑化、水面等の面積がわかるもの
- 樹木台帳：敷地の中の緑地にどのような高木（樹種、本数、場所、高さなど）が生えているかを見分けられるもの

- 上記から面積や本数などの数値を読み取り左記の調査表に記入
- 在来種 / 外来種や低木 / 高木、誘鳥植物などの植物の分類については、別表を活用

企業が使用管理する土地を、より生物多様性に配慮した土地に改善していくためには現状評価が必要になります。ＪＢＩＢでは、簡便な評価方法を研究し、その原案を作成しました。

■社員の理解を高める研究

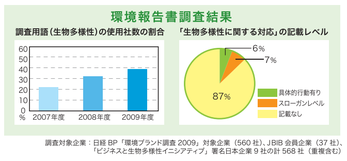
生物多様性の取り組みを進めるためには社員の理解が重要な鍵を握っています。ＪＢＩＢでは、社員の理解度を高めるツールとして「生物多様性ハンドブック」を作成し、社員教育の場で活用できるようにしました。

■継続性のある取り組みにするための研究

生物多様性の取り組みは、一過性ではなく継続した取り組みにすることが重要です。社内で継続的な取り組みを行うためには、活動方針・社内体制・運用の仕組み・取り組みの評価指標等を確立することが望ましいとされています。ＪＢＩＢでは、これに関係する情報を収集し、研究を行っています。

■海外を含む各企業での取り組み状況の研究

現在の企業の取り組みがどういう状況になっているかを、各社（海外企業も含む）の環境報告書から把握し、且つ取り組み状況の分析を行っています。その中で得られた好事例はＪＢＩＢ内で情報共有をしています。



調査対象企業：日経 BP「環境ブランド調査 2009」対象企業（560 社）、JBIB 会員企業（37 社）、「ビジネスと生物多様性イニシアティブ」署名日本企業 9 社の計 568 社（重複含む）

■コミュニケーションツールの研究

取り組みをすすめるためには、社内外とのコミュニケーションをとっていくことが重要です。ＪＢＩＢではWebを使ったコミュニケーションツールをＪＢＩＢホームページ内で開始しました。

▲JBIBホームページ
http://www.jbib.org/

■NGO・研究機関との意見交換会

ＪＢＩＢではステークホルダーとのコミュニケーションを通じて、ＪＢＩＢの活動内容を高めるように努めています。2008年はNGOとの意見交換会を開催し、2009年は、東北大学生態適用ＧＣＯＥと意見交換を行いました。

■ネットワーク会員向け勉強会の開催

ＪＢＩＢでは、2009年5月から生物多様性の初歩的な勉強をしたいとの希望をもたれる企業向けにネットワーク会員制度を作りました。ネットワーク会員は、年６回の勉強会やＪＢＩＢ内の情報共有を通じて、生物多様性の理解を深めることを目指しています。

■体験学習会の開催

生物多様性の取り組みを社内で広めていくためには、担当者が自ら自然の現場に入り、生態系と人間の関わりを体感し、理解を持つ事が必要です。ＪＢＩＢでは、毎年この体験学習会を開催し、理解を深めています。